

# カトリック的視点から捉えたマリア・モンテッソーリの「人格形成論」に対する一考察

モンテッソーリが出会った子どもの人格に焦点をあてて

濱 崎 久 美

A Study of Maria Montessori's Theory of Character Formation from a Catholic Perspective: Focusing on the Character of Children Whom Montessori Met

Kumi HAMASAKI

## 要 約

本研究においてはマリア・モンテッソーリ的人格形成論をカトリック的視点からとらえ直すことで、幼児期に人格の基礎を培う上で必要な教育のあり方に示唆を見出すことを目的としている。今回は、モンテッソーリの著書を通して考察を深めた。

モンテッソーリ的人格形成論を考察するにあたり、特に、彼女が人格を「神の似姿」として捉えているという点に注目した。その際、先行研究に見られる「神の似姿にますます近づく」という捉え方ではなく、「神の似姿が鮮やかに現れる」という点から考察することで、彼女的人格形成論の新たな側面を捉える試みを行った。

彼女は子どもとの出会いの中で、子どもの中に内在する神の似姿を見出し、神が子どもの中に創造という人格形成の道筋、法則を備えていることを確信した。彼女は子どもを観察することから出発し、子どもが秘めている精神活動に注目することで、「神の似姿」が鮮やかに現れてくるという人格形成論を構築していった。幼児教育において人格の基礎を培う教育を行うに当たり、彼女が示すこの人格形成論は重要な視点だと考える。

## はじめに

本研究においてはマリア・モンテッソーリ (M. Montessori, 1870-1952) の人格形成論をカトリック的視点からとらえ直すことで、幼児期に人格の基礎を培う上で必要なカトリック教育のあり方に示唆を見出すことを目的としている。

モンテッソーリ的人格論に関しては、マイケル・J・グロスがその著書『モンテッソーリ的人格観』の中で詳細に研究しまとめている。また、カトリック的視点からは江島正子が『モンテッソーリ的人格形成』という著書の中でキリスト教的人格観という視点から、モンテッソーリが人

間を「神の似姿」と捉えていること、また、教育観においては彼女が目指す教育が「神の似姿にますます近づいていくこと」であるということについて言及している。<sup>1</sup>さらに、モンテッソーリが「哲学的人間学と実証主義的な方法を人間形成の方法論として用いている」<sup>2</sup>と主張している。

一方クラウス・ルーメル師は教育学者の間でモンテッソーリが「カトリック教育学者」であるか否かで一致していなかったこと、また、カトリック側からも批判されていたことについて述べている。<sup>3</sup>しかし、同時にルーメル師はこの批判について第二バチカン公会議が開催される前のことであり、ある意味、モンテッソーリが時代を先取りして歩いていたことを指摘し、彼女が「真の意味での『カトリック』すなわち全ての善人と縁を結べる人物であった」<sup>4</sup>と解説している。

このように、先行研究によりモンテッソーリが確かな人格形成論を有していたこと、また教育の根底にキリスト教的人間観があり、カトリック的教育学者であるということが明らかにされている。これらの先行研究をもとにモンテッソーリの著書を通して、彼女が出会った子どもの人格に注目して、モンテッソーリの人格形成論を考察する。特に今回は、彼女が人格形成論を展開するに当たり、人格を「神の似姿」として捉えているという点に注目する。その際、先行研究にみられる「神の似姿にますます近づく」という捉え方ではなく、「神の似姿が鮮やかに現れる」という点から見ていく。なぜなら、モンテッソーリが出会った新しい子どもの姿は、人間が本来「神に似せて創られた」姿であると考えからである。彼女は誕生後に様々な抑圧によって覆い隠されていた人間本来の姿である神の似姿が、教育的関わりによって鮮やかに現れたことにより、この現象が現れるために必要となる条件を研究し、神の創造の業に参与する道を見出したと推測する。

そこで本稿においては1．モンテッソーリが出会った子ども 2．「神の似姿が鮮やかに現れる」条件 3．人格に仕える教育 という3つの視点から考察する。

## 1．モンテッソーリが出会った子ども

モンテッソーリはその著書に、自身の生涯の中で人生を左右する子どもとの出会いについて記している。その出会いにおいて、彼女は直感的に子どもに内在する神の似姿を見出していることが伺える。なぜなら、後に彼女は子どもを通して神の意志が示されているため、それを聞きとる必要があることを強調しているからである。彼女は子どもに内在している神の似姿から子どもの人格形成における神の意志を理解し、それを受け取り教育の基盤としたと考えられる。

そこでここでは、子どもとの出会いの中で、モンテッソーリが神の似姿をどのように見出したかについて考察する。

### ① 貧しい子どもとの出会い

医大生であったモンテッソーリと子どもとの重要な出会いについて、E.M.スタンディングは「予

言的なできごと」として紹介している。それはピンチオ公園での出来事で、物乞いの女が連れていた2歳くらいの子どもの出会いである。モンテッソーリは医学部をやめ別の職業で身を立てようと決断し、解剖室を後にして帰路についていた時の出来事であった。物乞いをする母親と対照的に小さな色紙で遊んでいる子どもの幸福そうな表情を見たモンテッソーリは自身の内面に衝撃が伝わるのを感じたのである。説明のつかないその衝撃は、彼女をふたたび解剖室に向かわせたのであった。スタンディングはこのエピソードがモンテッソーリを天職に向かわせた出会いであったと記している。更に彼は、モンテッソーリについて「こどもの魂の明らかになされた深みに、新しい光をあてるためにこの世に送り出された」<sup>5</sup>人物であると述べている。

しかし、スタンディングはモンテッソーリが自分の使命が教育の分野にあるとはその当時考えもしなかったことであると述べ、彼女の自伝から引用し、医学の道の過程が人生における間接的な準備になっていたと強調している。<sup>6</sup>「この医学界での学びや経験が、彼女の子どもを見る視点やその教育法に大きく影響していることは言うまでもない。

リタ・クレマーもこの子どもとの出会いがモンテッソーリにとって特別な意味を持っていたと強調する。なぜなら、モンテッソーリがスタンディングやA.M.マッケローニに対してとても印象的な話し方をし、後に二人がこのモンテッソーリの話を「救世主の出現 何かが見れた瞬間」<sup>7</sup>として回想しているからである。クレマーはモンテッソーリがこの出会いにおいて「ある種の神秘的な目標を信じ、果たすべき目的があることを感じ取った」<sup>8</sup>瞬間であったとしている。

このように、モンテッソーリは子どもの姿から神秘的なメッセージを受け取ったのである。彼女は現実の貧しさとはかかわりなく、幸福に満ちあふれている子どもの表情の中に、神の似姿の本質である人格の尊厳に触れたと考えられる。

## ②障がい児との出会い

大学を卒業後、ローマ大学の精神科クリニックで医師の助手としてはたらきはじめたモンテッソーリは精神病患者のための保護施設を訪れ、そこで精神病患者と一緒に収容されていた障がい児と出会うことになった。彼女は空っぽの部屋に収容されている子ども達が、食後に床に落ちているパン屑を手で扱う姿を観察し、彼らが単に卑しいのではなく、本能的に身近にあるものから知性への糸口を求めていることに気づいたのである。このことがきっかけとなり、モンテッソーリは子ども達が内面に自己を成長させる力を秘めていること、また子ども達にとって必要な援助が医学的治療ではなく、教育的な関わりの中にあることを確信した。

そこでモンテッソーリは障がい児も健常児と同等に教育の利益を受ける権利があるとし、1899年から1901年の2年間「Scuola magistrale Ortofrenica（治療教育研究所）の所長として障がい児に授業を行ったのである。その結果、子ども達は「立派に読み書きができるようになり、普通の児童と一緒に、公の試験さえ受けてかなり良い成績を示す」<sup>9</sup>ことができるようになったのである。この結果は、多くの人々の賛辞を受けることとなった。

彼女は障がい児の教育を行うに当たり、当時知られていた障がい児に関係あるあらゆる教育法を学んでいたが、特にエドワール・セガン (Eduard Seguin) の教育法に強い関心を持ち、これを教育に取り入れている。なぜなら、彼が用いた教材は精神的性質のものであり、集中力や注意力、調整力や正確さなどの精神活動を促す要素が含まれていたからである。特にモンテッソーリは感覚に働きかけること、筋肉の調整ができることという精神活動にとって重要な2つの要素が含まれていることに注目していた。

同時に彼女は、セガンが示す教師の姿勢についての考え方にも関心を寄せている。彼女は、セガンが自身の著作の巻末に記している「教師が養成されなかったら、これは忘れてしまわれる」<sup>10</sup>という言葉に注目している。彼女は、セガンが障がい児の疲れたもろい魂に、より良く働きかけられる教師の養成を目指していたということに共感していたのである。モンテッソーリ自身も教師が子どもの精神に働きかけることによって、障がい児と卑しめられている子ども達が、知的人間として生まれ変わることができることを確信していたのである。

そのために彼女は「子どもの心の中に入って、そこに眠っている人間に話しかけ」<sup>11</sup>、彼らに呼びかけることによって覚醒させる必要があると述べている。彼女は子どもとの関わりの中で、この覚醒によってこそ子ども達が教材に向かい、それを用いて自分自身を教育するよう駆り立て、人格を形成するという使命を果たしているということを確認したのである。また、モンテッソーリは、教育には「魂の触れ合い “a contact of souls”」が不可欠であり、その教育を行う教師は子どもに対して「敬意と同感 “respect and sympathy”」を持って関わるのが重要であることを示唆している。<sup>12</sup>なぜなら、教育を行うに当たり、教師は幼児の心の生活に十分配慮し、幼児の心、つまり精神の発達を助けなければならないからである。

このようにモンテッソーリは、障がい児との関わりの中で人間の内面、精神界にひそむ宝に気付いたのである。そのため、彼女は自身も障がい児の教育に携わり、障がい児の精神が進歩できるよう、その教育に集中して取り組むことを優先したと言える。同時に、彼女は子ども自身の中に発達を助ける魂の力があり、環境と関わりながら人格を形成していくことも見出した。なぜなら、障がい児の姿を通して、人間がその本性の中に知性への刺激を求める傾向性を持っていること、そのために環境が必要であることに気付いたからである。

こうした教育活動の中で、モンテッソーリは子どもの中に潜んでいる原石を見出し始めるのである。そして今後、それが神秘的な神の似姿としてモンテッソーリの目の前に鮮やかに現れ出ることになるのである。なぜなら、彼女は子どもが持っている原石を見出し、原石を覆っている物質を内外から取り除き、子ども自身がその原石に磨きをかけるための方法を見出していくからである。

このように、彼女は障がい児との出会いによって、子どもの内面に潜む「神の似姿」の原石に気付く、自身が行ってきた教育の中に人格形成が行われるための原理、すなわち「理性的な教育原理」<sup>13</sup>が含まれていることを見出したのである。そしてそれが、健常児の教育にも適応できるとの確信を得たのであった。

### ③健常児との出会い

モンテッソーリは健常児のための教育に取り組むに当たり1901年、ローマ大学に再入学することになる。それは、健常児のための教育の原理と方法を研究するためであった。そして数年後、研究を重ねた教育法を実践できる機会が訪れるのである。1906年、彼女はローマのサン・ロレンツォに開設する就学前の子ども達のための施設の管理を依頼されることになった。その時彼女はこの施設における「社会的教育的意義」<sup>14</sup>を全面的に意識し、未来においてこの逸脱した状態にある子ども達が、成熟した人格にまで成長していくという壮大な思想を抱いていたのである。

この施設は「子どもの家」(Casa dei Bambini)と名付けられ、彼女はここで50名以上の子ども達に出会うことになった。この子ども達の印象を彼女は「野生の子ども達の群れのような」<sup>15</sup>と述べている。しかし、この子ども達が子どもの家で、モンテッソーリの教育を受けることによって人々の驚きと敬意と共に、「神の似姿」を新たに感じさせるほど「変化」していくのである。

彼女は教育が「教育されるべき人の研究と測定結果に基づくものではなく、その人を変えられる継続的取扱いを前提とする」<sup>16</sup>と述べているが、これは教育する子どもを「観察」するだけではなく「変化」させる必要性があるということである。実際、モンテッソーリは自ら考案した教材を子どもに与え観察し、その結果、子ども達は見違えるほど変化したことは先に述べたとおりである。モンテッソーリはこの変化の背景に、自身が準備した教材が子どもを引き付けると、その子はすぐ全注意力を教材に注ぎ、作業し、休みなく精神集中して作業を終えるという事実があることを見出したのである。このことにより、彼女はこの教材が精神的性質をもち、これを使用することにより教育が個人を変化させ、より良い人間に造り変えて、内在する「神の似姿」が現われるのを可能にするとの確信を持った。つまり、精神活動によって覚醒した子ども自身が「創造の業」を展開し、より良い人格として成長していくことを見出したのである。モンテッソーリは、子どもが作業を終えて初めて満足し、休息し、幸福な姿を見せ、精神上健やかになるという現象を幾度も目撃し、初めは錯覚ではないかと思ったと記している。<sup>17</sup>しかし、彼女はこの事実を、感動を持って受け止めるに至ったのである。

そして、彼女は著書の中でこのような純粹さ、単純さ、素直さを持つ子どもを抱き寄せて話されたイエスの言葉を引用している。「このような一人の幼子を、わたしの名のゆえに受け入れるものは、わたしを受け入れるのである」「あなたたちは、幼子のようにならなければ天国に入ることはできない」<sup>18</sup>という言葉である。「子どもの家」で幼児教育を始めたモンテッソーリはイエスが抱き寄せたと同じ子ども達に出会い、深く心を動かされ、手を胸に置き、子ども達への畏敬をもってついに「あなたがたはどなたですか」と問うたのである。彼女が子ども達に内在しているキリストに出会った瞬間であった。そのとき彼女は、確かに「神の似姿」が子どもの内に存在し、ふさわしく整えられた機会が与えられれば、「神の似姿」は鮮やかに現れ出るということを確信したのである。

このようにモンテッソーリは、教育によって「人格形成」を行うために健常児の教育を行う中で重要なことを見出した。それは教師によって心を覚醒させた子どもが精神的性質を持つ教具を

使用すると、その「人格」が今の状態より良い状態に変化していくということであった。その過程の中で、モンテッソーリは子どもの内に潜む神の似姿が鮮やかに現れ、輝きを増すのを見たのである。

## 2. 「神の似姿が鮮やかに現れる」条件

モンテッソーリは子どもとの関わりの中で、子どもの中に内在する神の似姿が鮮やかに現れるためにはいくつかの条件があることを見出した。特にそれは「子どもの家」で見られた現象によるところが大きい。彼女は「子どもの精神の奥に秘められている潜在的特質が解明され」、「人間の内面的形成の法則」を見出したと述べている。<sup>19</sup>

そこでここでは、子ども的人格と精神について、また「神の似姿が鮮やかに現れる」ための条件について考察する。

### ①子どもの人格と精神

さて、当時の人々の多くは子どもを一人の人格者として捉えていなかった。しかし、モンテッソーリは、人間が「人格的」存在であるなら、幼児期からすでに「人格的」存在であると捉えていた。しかも、人間は「精神」として特徴付けられる特有な人格の中心によって形成される存在であると捉えていたのである。彼女はこの人間の精神について、「人間の一番大切な部分である精神は決して人間から生まれてくるものではなく、神から直接に作られたものであるという真理です。」<sup>20</sup>と述べている。また、彼女は子どもを知性の段階へ到達させているのは、子どもの中に存在する内的指導者であるとし、「子どもが生まれながら力 エネルギー を自分の中に宿していると考えなければならないのです。わたしたちは、ただ子どもをみるばかりではなく、子どものなかにおられる神をみるべきなのです。わたしたちは、子どもに内在する宇宙法則を尊重しなければなりません。」<sup>21</sup>とも述べている。

このことから、モンテッソーリが人間の精神を「神の似姿」として捉えていることが分かる。つまり、彼女は神が創られた精神の中に神の現存とその働きを見、神の働きに参与する必要があること、神が子どもに与えている法則に従って教育を行う必要があることを悟ったのである。

その際、彼女は「精神」が本質的に創造的な要素、すなわち「活動と自由」を内包するものであると考えていた。この精神の働きによって集中現象が現れ、新しい子どもが出現したのである。モンテッソーリはこの新しい子どもは普通では見られないような態度をとることができるようになることから、「内的な力あるいは潜在意識と関連して、これが人格を作っているようです。」と述べている。<sup>22</sup>つまり人格は教えられて形成されるのではなく、子ども自身が自分の人格を作り上げる力、自己形成力を持っているということ、同時にその力は神から与えられているものであるということを示している。

更に、モンテッソーリは精神の肉体化についても述べ、人間の人格が形成される構成作業が「精

神の受肉化という隠れた仕事 (a secret work of “Incarnation”)<sup>23</sup>であると強調している。彼女はこの受肉化について「精神がこの地上で生きるために、新生児の体の中で肉体になること」<sup>24</sup>であると述べている。そのため、精神が受肉化するのを手伝うのは外から働く大人ではなく、子ども自身なのである。子どもは精神活動と結びついている運動、つまり自分の意志によって動く随意筋を使い運動の調整を行っていく中で精神を受肉化させていくのである。この受肉化のための構成計画は神が子どもの心の内部に備えたものであり、子どもはこの計画を実行し、進めていくのである。

しかし一方では、様々な環境条件によりこの力が発現していない子どもがいることも事実である。そのため、彼女はこのような子どもの人格の発達については、自己訓練を積む機会を与える必要があると強調している。<sup>25</sup>そこで、彼女は教育の中で自己訓練ができる機会をつくり、教具を使って精神活動が展開できるようにしたのである。このような経験と練習を通して、子どもは自身の人格を造りあげる力を覚醒させ、その力によってより良い人格を創りあげるのである。なぜなら、子ども自身が「神に向かって進もうとする多くの要素」<sup>26</sup>をすでに持っているからである。モンテッソーリはこの要素を発見したことにより、子どもが神に向かって進もうとする要求に畏敬を示し、その要求を満足させる方法を考え、そのための環境を作っていたのである。

では、人格が形成されていく過程の中でどのような特徴が現れるのだろうか。モンテッソーリは子どもの姿の中に無秩序ではなく秩序、喧騒ではなく静粛、粗野ではなく品位、不正確さではなく正確さ、杜撰さではなく緻密さ、不道徳ではなく道徳、消極性ではなく積極性を、更には驚くほどの注意力や集中力、責任感、規律や従順、正義感や正直さ、自身による誤りの訂正や快活さなど、より良い精神が発ち現れるのを見たのである。同時に、彼女はこのような精神的発達をより良く促すための条件を、子どもの姿から1つ1つ拾い上げていったのである。

この現象は、モンテッソーリの推測を越えるものではあったにせよ、彼女自身の直観はすでにその本質に気付いていた。なぜなら、彼女はキリストの公現の祝日に開校された「子どもの家」の開校の挨拶にその日のイザヤ書60章を取り入れ、子どもの家が「新しいエルサレム」<sup>27</sup>になるだろうと話しているからである。「起きよ、光を放て、あなたの光が臨み、主の栄光があなたの上にのぼったから」<sup>28</sup>というイザヤの預言のように、呼び覚まされた子ども達の力が覚醒し、内面に存在する原石が磨かれ、光を輝かし始めることを直感していたのである。また、彼女はこの子どもの心の中で起こった出来事が一種の復活であるとも述べている。<sup>29</sup>なぜなら、彼女でさえ治らないのではないかと危惧していた多くの性格的欠陥が無くなり、新しい子どもに変化したからである。このことで、彼女は子ども達が根本的に自分を創造していくための創造エネルギーを持っていることをも見出した。

このように、モンテッソーリは神が創られた子どもの精神を見ることで、神と出会い、神が子どもの人格形成のために与えた法則を受け取り、その法則に従って精神活動を展開させる方法を導き出していったのである。その結果として、彼女は子どもの中に内在する「神の似姿」が鮮やかに現れ出る瞬間を目撃し、そのための条件を導き出していったのである。

## ②「神の似姿が鮮やかに現れる」ための要因

モンテッソーリ教育を受けて育った子どもについて相良敦子が著書『モンテッソーリ教育を受けた子どもたち』<sup>30</sup>でまとめている特徴を見ると、とても興味深い。そこに見られる子どもの特徴は以下の通りである。何かを成すときには必ず自分で判断して選択し、責任を持って意欲的、積極的に行動する。選択した事柄には目標を定め、準備、段取り、片付けまでの計画を立てて実行する。行動に際しては注意深さがあり正確で、解決能力が高く、集中して最後までやり遂げる。人が嫌がることを黙ってする。礼儀正しい。善悪の判断がきちんとできる。協調性があり、弱い立場の人を思いやることができる。これらの特徴を見ると、上記で述べたモンテッソーリが見た子どもの特徴が現代でも見出されていること、また人としての人格が形成されていることが分かる。このような子ども達の人格形成の過程をモンテッソーリは観察によって見出し、その法則と原理、人格形成のために必要な条件を構築していったのである。

さて、モンテッソーリは子どもが精神活動を通して変化していくことに深い感動を持ったが、この感動だけにとどまらなかった。彼女は外からの原因なしに作業を終えた子どもを前にして、次のような問を出している。それは「何が終わったのですか。なぜ終わったのですか。」<sup>31</sup>という問いである。この問は、子どもの中に内在する神の似姿を発現させるために、何が原因で始まり、行われ、終結したのかという要因を問うものであった。彼女は子どもを観察し、子どもと関わり実践する中で、共通する活動のサイクルがあること、その活動が展開されるために必要な条件があることを確信した。そこで、この2点について見ていく。

まず、共通の「活動のサイクル」<sup>32</sup>について見る。これは子どもが目的物の自由選択を行い、練習を繰り返し、繰り返す中で集中し、自己完結によって終了、そして次の課題のためにまた自由選択を行うというサイクルである。この中で、注目すべき点は練習の繰り返しの中で見られる注意力や、集中力、意志や知性の働きである。彼女はこれらが「精神に導かれる手の運動」<sup>33</sup>によってなされるものだとし、運動の重要性も述べている。また、自己完結による達成感や満足感を得ることで精神的喜びを味わい、幸福、平和が訪れ、その結果として、本当の子どもが内面から発ちあらわれることも示している。さらに、子どもはもっと知りたい、他のことも一人で出来るようになりたいとの欲求を膨らませることで、活動のサイクルを繰り返しながら、人格を形成していくことを強調している。

モンテッソーリは、この活動が子どもの生活にとって、「全ての発達に密接に関連する一種の精神的新陳代謝」<sup>34</sup>と同じ意味であると述べている。つまり、この活動のサイクルは人として生きるために必要不可欠なものであり、新陳代謝を行うためのエネルギー、精神的エネルギーが子どもの中で活発に躍動していることを意味している。精神的新陳代謝を行うことで、子どもは変化し、内面からより良くなりたいとの思いに突き動かされ、発達するのである。これらが、活動のサイクルが展開している子どもの内面で行われていることである。

この活動のサイクルが展開されるきっかけとなる要因は、子どもの興味・関心と活動とが一致した時であることは言うまでもない。子どもは自分の成長発達のために必要なメニュー表を持つ

ているため、今、自分が食べたいと思っているものが目の前にあれば喜んでそれを食べるのである。しっかり、満足するまで食べた子どもは心身ともに元気になる。つまり、子どもが活動のサイクルを展開できるように、子どもが持っているメニュー表に沿った活動を準備しておく必要があるということである。そうすることで、子どもの人格は内面からしっかりと築きあげられるのである。このように、彼女はある時期に子どもが特定のものに特定期間強い興味を持つ時期、いわゆる敏感期という傾向性があることに気付き、それに必要な環境を準備し、教育に利用したのである。これは自然の法則に従うことでもあった。そのため、この活動のサイクルは条件がそろえば全ての子ども達の内面で展開される活動なのである。

次に活動が展開されるための必要な要因、特に外的要因として環境・教師・教材という3つを必要条件として見る。

1つ目の要因は環境である。彼女は子どもの内面に「隠れている正常な精神的性質の開花」<sup>35</sup>を促すことができる環境であることを重視している。今ある逸脱した性質の発達ではなく、その子が本来持っている性質を見出し、その性質が正常に発達することを可能にする環境である。彼女はこのような環境を創り出すためには「障害を除くことだけで十分です」<sup>36</sup>と述べている。つまり、環境の中にある子どもにとって障害となるものを除くことが、子どもの成長を促すことになるということである。なぜなら、障害がなくなった環境にこそ子どものエネルギーが働きかけることができ、同時にこの環境がエネルギーの活動に必要な手段を提供することができるからである。

次に2つ目の要因は謙遜な教育者である。モンテッソーリは、神御自身が子どもの肉体的及び精神的生命に対する一定の発育法則を定めている、と述べている。<sup>37</sup>そのため、子どもの正常な発育について責任を担っている人、教師はこの法則に従う必要があると強調する。なぜなら、この法則には、子どもの内に働いている神の精神と知恵が潜んでいるからである。つまり、子どもの客観的な要求の中に、神の望みを見出し、尊重すべきものとして受け取り、その要求を満たすために子どもに尽くす必要があるということである。このことを理解するならば、教育者は謙虚にこの法則に従うことになる。彼女はこれを教育者が持つべき「真の教育精神」だとしている。また、教師の手本として彼女は「彼は必ず栄え、わたしは衰える」といった洗礼者ヨハネの態度を提示している。<sup>38</sup>このような「精神的謙遜」さがあるからこそ、教師は子どもの人格に対して敬意を払い、神の創造の業に参加できるのである。

3つ目の要因は教材である。モンテッソーリは「子どもに適当な魅力ある、五感の発達を促進する教具を使用させること」<sup>39</sup>が重要だとしている。この教具によって運動の分析が行われ、子ども達の機能が発達し、行動の中に正確さや緻密さが見られ、注意力の集中が引き出されたのである。この集中は外からの働きかけによるものではなく、活動を通して子ども自身の心の中から湧き上がってきた集中である。この集中する現象が起こった後、必ず子どもは内面からの輝きをあらわすのである。モンテッソーリが子どものために用意した教材は子どもの内的欲求に応えるもので、魅力的であり子どもの傾向性をよく捉えたものであった。

このように、モンテッソーリは子どもの発育の中に神の法則を見出し、その法則に従って活動のサイクルが展開され、子ども自身が人格形成できるように条件を整えたのである。この整えられた条件下にあって、子どもが秘めている「神の似姿」が鮮やかに現れ、これまで見せていた逸脱した姿から新しい姿に変化すること、また、子ども自身がこの「神の似姿」を成長させていくことを示したのである。

### 3. 人格に仕える教育

ここでは、モンテッソーリが神の似姿を秘めている子どもの人格形成のための教育をどのように捉えていたかを考察する。モンテッソーリはある教育法に注目するのではなく「人間の人格性が注目されるべき」と述べ、自身の教育法が「人格とその独立性を獲得するための援助」とであるとしている。<sup>40</sup>そのために大人がなすべきことは、子どもが自然の法則に従って創造のための活動を始める時期を待ち、子ども自身が特有なやり方で発達できるように活動の自由を保障することなのである。彼女は大人が余計な干渉をしなくても、神がつくられた自然が空の鳥や野のゆりに心をくばるように、子どもに対しても心をくばられるということを確認していた。そのため、人格の教育においては神の定めた法則に従い、精神活動を通して人格形成を行っている子どもに仕えることが重要なのである。モンテッソーリはこの点について「子どもには神の創造のわざに参与している側面があり、この観点から子どもに仕えなければならないということです。わたしたちは子どものこの創造のわざに奉仕するものとなりましょう。」<sup>41</sup>と述べている。

そこで、ここではモンテッソーリ的人格形成論とカトリック信仰、子ども達のいのちに仕える教育、そしてモンテッソーリ教育が幼児教育に与える影響について考察する。

#### ①モンテッソーリ的人格形成論とカトリック信仰

モンテッソーリは人格を「神の似姿」として捉えていたことはこれまで述べてきた。それらをカトリック信仰の教義と照らし合わせて見ていく。

『カトリック教会のカテキズム』 第3編キリストと一致して生きる 第1部人間の召命、霊における生活 第1章人格の尊厳には次のように記されている。

「人格の尊厳は、神にかたどり、その似姿として造られたことに根ざしており、神の至福にあずかるように召されていることによって実現されます。自由意思の決定によってこの完成を目指すのが人間の本分です。人間は熟考して決定した行為によって、神が約束され、良心が認める善に従うこともあれば、従わないこともあります。人間は自らを啓発し、内的に成長します。すなわち、自分の感覚的・精神的生命の全てを成長の糧とします。恵みに助けられ、徳を涵養し、罪を避け、罪を犯したときには放蕩息子のように天の御父の慈悲に自らをゆだねます。こうして、愛の完成に至ります。」<sup>42</sup>

カトリックの信仰において、神の似姿は受胎の時から一人一人の人間の中にすでに刻まれてい

るのである。そうであれば、環境によって影響を受けていない乳幼児はその姿の中に神の似姿を現しているともいえる。モンテッソーリはこの乳幼児の中に刻まれている神の似姿に気付いたのである。

また、彼女は精神活動を終えた子どもが幸福に満たされている姿そのものに神の至福に満たされている状態を見たのである。このような精神活動を通して子どもは落ち着き、意志の働きが活発になり、自分で考え判断して自己選択し、決定したことについて責任を持って行動するようになる。同時に、従順さが芽生え、自分の意志によって従順を実行するようになるのである。この一連の子どもの中の成長の中に、モンテッソーリは神の働きを見ていた。彼女は子どもが自然に自分の感覚的・精神的生命の全てを成長の糧とすることができることを確信していたのである。なぜなら、彼女は、子どもには自分を創造する力が神から与えられているということを理解していたからである。このことは、モンテッソーリがある集会において「子どもたちのあの純粋な光が、消え去ることのないように、あなた方の使命をはたしてください。さらに、神の導きの手が子どもたちに植えつけた自然の諸力を、子どもたちが、芽生えさせるように保護してください。」<sup>43</sup>と述べていることから理解できる。

さらに、彼女は自身の教育法が「人類の一致と世界平和を宣言する」<sup>44</sup>教育法であると述べている。つまり彼女の教育法は愛の完成に向かうものであるということである。彼女は子ども達が秩序を愛すること、良くなりたいたいという思いを秘めていることを理解し、それらをより良く導きだす方法を構築していったのである。『カトリック教会のカテキズム』は次のように言う。「人格は神の霊と光と力にあずかります。創造主が定められたものごとの秩序を理性によって理解することができますし、自分自身を自分の意志で自分の真の善に向かわせることができます。また、真と善とを求めたり愛したりしながら自己を完成させていきます。」<sup>45</sup>彼女はこのような人格の形成を目指していたと言えよう。また、彼女は1952年5月5日、亡くなる3か月前に行われたイギリスの「カトリック・モンテッソーリ協会」創立の祝辞の中で「子どもを弱いものと考えないでください。人間の人格を形成するのは子ども自身だからです。この人格がキリスト教的になるか、あるいはキリスト教的にならないかは、環境および宗教教育を指導する私たちの努力しだいです。・・・中略・・・子どもたちのあの純粋な光が消えることのないように、あなた方の使命をはたしてください。」<sup>46</sup>と述べている。

このように、モンテッソーリの宗教心と子どもに対する愛はとても深いものであり、子どもの中にある神の似姿の輝きを消すことなく、より鮮やかに輝かせるようにと願っていたのである。これらのことから、彼女の人格形成論はカトリックの信仰に深く根差したものであったといえよう。

## ②子どものいのちに仕える教育

モンテッソーリは、自分の子どもであるおたまじゃくしのことを何でも知っていると思っているお母さんカエルをたとえ話にして、いのちに仕えることの重要性を次のように述べている。あ

るお母さんカエルが、地上の素晴らしさを子どものオタマジャクシに話し、水の中にいるよりも強く健康でかわいいカエルになれるから水から出てくるように、と勤めるたとえ話である。モンテッソーリはこのたとえ話の最後に、もし、おたまじゃくしが母親ガエルの言葉に従い池から地上に出てきたら死んでしまうでしょうと述べている。つまり、大人の生きる環境と子どもの生きる環境は違うということを大人が理解していないと指摘しているのである。また、このたとえ話を通して、大人はとにかく優れた人格者で、礼儀正しく、知的で有能な人間に育てたいと思う一方で、このお母さんガエルのように間違っただけの子どもの関わり方をしていることを指摘し、このような関わり方が子どもの正常な人格形成を妨げ、子どものいのちを危険にさらしてしまう結果になっていると忠告している。だからこそ、彼女は、「子どもに大人の道を教える代わりに子どもが自分の生き方を自分で決めるために自由を与える」ようにと勤めるのである。このような自由を得ることで、子どもは自分の中にある成長のプログラムに沿って自分を成長させていくのである。つまり、子どもには自己教育力があり、子どもの骨や筋肉が食事や運動をすることによって自然につくられるように、精神や人格も子ども自身の精神活動を通して作られるということである。そのため、先にも述べたが、大人が子どもに対してできる最大限の援助は「子ども特有の作業に子どもが固有の方法で取り組むための自由を提供すること」<sup>47</sup>なのである。

また、モンテッソーリは子どもを神の手から授かったものとして捉え、子どもの中に神の法則を認め、「子どものうちなるキリストに対しての畏敬の念に導かれて、その子どもの人格が完成されるまで助け育てなければならぬ」<sup>48</sup>とも述べている。彼女は子どもが神から生命を与えられていること、また真と善を求めたり愛したりしながら自己の完成に努める子どもを、神の法則に従って助け育てる必要があることを理解していた。そのため、彼女は「生命を助ける、このことが基本原理」<sup>49</sup>であり、「子どもに仕える、とは、生命に仕えること」<sup>50</sup>でもあると宣言しているのである。

この点について、『カトリック教会のカテキズム』を見ると「人間は知性と意志とをもった靈魂を備えており、受胎の時からすでに神に方向づけられ、永遠の至福へと招かれています。そして、真と善とを求めたり愛したりしながら自己の完成に努めます」<sup>51</sup>と記載されている。モンテッソーリの人格形成への理解がこの教義に基づいたものとなっていることが分かる。彼女にとって、子どものいのちを助けるとは、子どもが発達し、人格を形成していくために定められている神の法則に従い、その法則が妨げられることなく行使できるように必要な環境を整えることなのである。これは、子どもを満足させ、好きなことをさせるということだけではなく、自然からの指示とその法則に協力することであり、環境における経験を通して子どもの発達を達成させることなのである。

一方、この時期の子どもは自分の意志で行動したがる傾向がある。そのため子どもが活動に興味を持ち集中しているときは観察し、子どもが助けてほしいと合図を送るまで干渉してはならない。なぜなら、この活動を通して、子どもは確実に自分を発達させているからである。モンテッソーリは「わたしたちの役割は頼まれたときに援助することです。」<sup>52</sup>と述べ、作業を通して集中

現象をおこしている子どもの活動を守るようにと勤めるのである。

また、モンテッソーリはこの集中現象が「生命の一部」<sup>53</sup>であると強調している。そのため、この集中現象が大人によって干渉され、抑圧されると、子どもの内面にある大きな活動のエネルギーが押さえられ、子どもは逸脱してしまうのである。だからこそ、この活動的生命を回復させ、発達のための活動エネルギーを再び解放しなければならないのである。モンテッソーリはこのことについて「個人の発達にとって生命衝動“vital force (horme)”となる創造的力に対しての自由」が必要であると述べ、この創造的力の目的が本来あるべき姿の人間を形成することであり、この目的のために手助けをする必要があるということも強調する。<sup>54</sup>

さらに、このような活動について彼女は「活動の集まったものが生命であり、活動を通してのみ生命の完成が求められ達成される」<sup>55</sup>としている。特に、運動の目的を「生命全体と、世界の精神的普遍的調和に仕えるところにある」<sup>56</sup>とし、精神の表現である意志に従って随意筋が動くように調整されることによって統合される必要があるとした。彼女は、子どもが自分の精神生活の実際面と実行面を豊かにするために運動の調整を発達させることも重要である、と考えていたのである。<sup>57</sup>運動は環境や他の人々と関わり、文化生活を過ごす上で必要不可欠なものである。そのため、運動の調整が精神によって創造され、完成されなければならないのである。この完成していく過程の中で、子どもに知識と愛がもたらされ、以前にはかくれていた「霊的人間を顕わにする様な変化」<sup>58</sup>がもたらされるのである。彼女は「子どもの隠れた靈魂からなにかがあらわれてきて、子どもは集中し、新しい生命を獲得する」<sup>59</sup>ことを確信していたのである。

一方で、モンテッソーリは「生命に対する手助けをしたいと望むならば、生命をつかさどる法則を知るのが第1条件」であるとし、生命の法則(The laws of life)が人間全体に当てはまる共通の『人間法則』であるということも示している。<sup>60</sup>これは、子どもの役割が物を生産することではなく、人間そのものの創造、全人類の創造を行っていることを示唆している。そのため、集中現象の結果として、子どもの中で社会環境に適応する準備が行われるのである。モンテッソーリは子どもたちに「神からいただいた恵みのように、社会的感情がそなえつけられている」と述べ、子どもの社会を「連帯意識による社会」と名付けている。<sup>61</sup>子どものこの社会において、年長児が年少児を助け、年少児は年長児を尊敬するといった相互援助やクラスにおける集団生活の一致、協力や調和が生み出されるのである。また、モンテッソーリが特に注目している一つとして子どもの従順の芽生えがあげられる。彼女は従順が「個人の人間形成の中から生じてこなければ抑圧となります。従順は個人の自己表現と自己完成です。」<sup>62</sup>と述べ、高度な人格形成が達成されることを示している。

このように、人間には隠れた本性と隠れた力が内在しているのである。それゆえ彼女は「子どもの国は神の国です。」と述べ、子どもの社会が愛情、好意、相互援助で満たされた社会であると強調する。<sup>63</sup>彼女は誕生の初めから、このようないのちに仕える教育を行うことによって暴力を含まない平和的な解決策を導き出すことができ、暴力を用いない改革を行使し、平和を建設できると確信していたのである。

## おわりに

モンテッソーリは教育の最高目標を「人格の価値を高めること」<sup>64</sup>であると述べている。彼女にとってそれはまさに子どもが「神の似姿」を鮮やかに現していくことで、より良い人格を形成していくことなのである。つまり、子どもが密かに成し遂げている自己の創造という仕事に、大人が尊敬と愛を持って参与することにより、将来の人格の基礎が形成されるということである。モンテッソーリが幼児期の精神の発達を強調するのは、この精神こそが「神の似姿」のしるしだからである。同時に、この精神の発達を促すのが運動であり、この精神と運動が統合されることにより人としての品位、徳などの人格が形成されるのである。

モンテッソーリは子どもを観察することから出発し、子どもが秘めている精神活動に注目することで、「神の似姿」を見える姿に体现するという人格形成論を構築していったと考える。幼児教育において、人格の基礎を培う教育を行うに当たり、彼女が示すこの人格形成論は重要な視点だと言えよう。

今後は引き続き、理論研究を行い、実際にモンテッソーリ教育が行われている現場の子ども達の観察を通してモンテッソーリの「人格形成論」について明らかにしていきたい。

## 引用文献

- 1 江島正子『モンテッソーリの人間形成』学苑社、1993年 p.10
- 2 同上、p.22
- 3 クラウス・ルーメル『モンテッソーリ教育の精神』学苑社、2004年 p.133
- 4 同上、p.140
- 5 E.M.スタンディング著 クラウス・ルーメル監修 佐藤幸江訳『モンテッソーリの発見』エンデルレ書店 2004年 p.9
- 6 同上、p.9
- 7 リタ・クレマー著 平井久監修 三谷嘉明・佐藤敬子・村瀬亜里訳『マリア・モンテッソーリ子どもへの愛と生涯』新曜社 1981年 p.47
- 8 同上、p.47
- 9 『モンテッソーリの発見』、p.15
- 10 モンテッソーリ著、鼓常良訳『子どもの発見』国土社、2006年 p.40
- 11 同上、p.40
- 12 同上、p.43
- 13 同上、p.36
- 14 同上、p.48
- 15 同上、p.49
- 16 同上、p.44
- 17 モンテッソーリ著、鼓常良訳『幼児の秘密』国土社、2008年 p.135
- 18 同上、p.136
- 19 モンテッソーリ著、保田史訳『子供と教会生活』エンデルレ書店、1966年 p.238
- 20 同上、p.258
- 21 モンテッソーリ著、クラウス・ルーメル・江島正子共訳『子ども 社会 世界』ドン・ボスコ社、2012年 p.160
- 22 同上、p.35

- <sup>23</sup> 『幼児の秘密』、p.44
- <sup>24</sup> 同上、p.40
- <sup>25</sup> 『子ども 社会 世界』、p.42
- <sup>26</sup> 『子供と教会生活』、p.261
- <sup>27</sup> 『子どもの発見』、p.50
- <sup>28</sup> 同上、p.49
- <sup>29</sup> 『幼児の秘密』、p.167
- <sup>30</sup> 相良敦子著 『モンテッソーリ教育を受けた子どもたち』河出書房新社、増補新版 2016年 p.19
- <sup>31</sup> 同上、p.140
- <sup>32</sup> モンテッソーリ著、菊野正隆監修、武田正實訳 『創造する子供』エンデルレ書店、2005年 p.158
- <sup>33</sup> 『幼児の秘密』、p.162
- <sup>34</sup> 同上、p.162
- <sup>35</sup> 同上、p.161
- <sup>36</sup> 同上、p.161
- <sup>37</sup> 『子供と教会生活』、p.259
- <sup>38</sup> 『幼児と秘密』、p.130
- <sup>39</sup> 同上、p.162
- <sup>40</sup> モンテッソーリ著、坂本義訳 『人間の形成について』エンデルレ書店、1942年 p.7
- <sup>41</sup> 『子ども 社会 世界』、p.50
- <sup>42</sup> 日本カトリック司教協議会 / 教理委員会訳・監修 『カトリック教会のカテキズム』カトリック中央協議会、2002年 p.522 1700項参照
- <sup>43</sup> 『子ども 社会 世界』、p.48
- <sup>44</sup> 『人間の形成について』、p.3
- <sup>45</sup> 『カトリック教会のカテキズム』、p.522 1074項参照
- <sup>46</sup> 『子ども 社会 世界』、p.47
- <sup>47</sup> 同上、p.11
- <sup>48</sup> 『子供と教会生活』、p.270
- <sup>49</sup> 『人間の形成について』、p.22
- <sup>50</sup> 『創造する子供』、p.283
- <sup>51</sup> 『カトリック教会のカテキズム』、p.523 1711項参照
- <sup>52</sup> 『子ども 社会 世界』、p.15
- <sup>53</sup> 同上、p.19
- <sup>54</sup> 同上、p.20
- <sup>55</sup> 『創造する子供』、p.93
- <sup>56</sup> 同上、p.141
- <sup>57</sup> 同上、p.144
- <sup>58</sup> 同上、p.21
- <sup>59</sup> 『子ども 社会 世界』、p.27
- <sup>60</sup> 『創造する子供』、p.12
- <sup>61</sup> 『子ども 社会 世界』、p.36
- <sup>62</sup> 同上、p.41
- <sup>63</sup> 同上、pp.44 45
- <sup>64</sup> モンテッソーリ著、P・オスワルト・G・シュルツェベネシユ編、小笠原道雄・高祖敏明訳 『平和と教育』エンデルレ書店、2007年 p.115

(2017年10月16日 受理)